



ブリュゲルの「子供の遊戯」(14)

——西洋美術史にみられる「子供の遊戯」小史——

森 洋子

ルネサンス(3) ——運動の重視

人生の諸段階の「幼年期」(第十三回、図42-48)などにみられる子供たちは、広場で輪回し、輪舞などのびのびと体を動かす遊戯に熱中していた。ブリュゲルの「子供の遊戯」でも、逆立ち、馬跳び、砂山への駆登りなど元氣いっぱいに肉体を鍛える遊戯が描かれていた。筆者の大学の同僚が語ってくれたところによると、ヨーロッパの学者たちは体育の側面からも、ブリュゲルの

絵や同時代の遊戯版画に注目しているという。こうした体育訓練はすでに中世後期において、騎士道の一要素としてかなり関心がもたれていた。先回でも触れた十五世紀中期の『ブルゴーニュ公妃の時禱書』の月暦ページに、青年たちの宮廷遊戯が描かれていたが、七月の「氷上での槍合戦」、十一月の「コルヴェン遊び」(ゴルフの前身)などは明らかに運動競技である。ルネサンスになると、人文主義者は「反スコラの反応の中で、遊びが教育的な可能性を有していることに着眼し^{注1}」、とくに体を

動かす遊びのもつ精神への影響を重要視するようになった。マントヴァのゴンザーガ家の家庭教師であったヴィットリーノ・ダ・フェルトレも、すべての子供の遊戯は身体註2の訓練や社会的相互作用のために役立つと主張した。彼はまた軍隊での訓練や単なるリクレイションとは別に、体操それ自体が忍耐を養うのに役立つ技であることを教えた最初の教育者かもしれない。彼は身体の規則的な練習は健康の基礎であるから、子供たちには強制的にもスポーツをさせなければならない、と述べた。ヴィットリーノの研究家ウッドワードは十五世紀のこうした状況をつぎのように説明している。「スポーツの価値は、健康な道徳的刺激を与えることであり、放縱、卑劣、また他人の利益や幸福に対する利己的な無関心さから守ることである。つまりスポーツの価値は今日よりも十五世紀において実際の学校教師たちがはるかに重んじていた議論であつた。註3」

ボヘミアとハンガリーの王ラディスラスは異教徒トルコに対してキリスト教徒として防衛力をつけるためにこ

う奨励した。若者たちは早くから、弓、投石器、槍の使い方を学び、騎馬、乗馬、跳躍、水泳を学ばねばならない。幼い子供に鼓舞すべきゲーム遊び——ボールや輪回し——は乱暴で粗野であつてはならないが、それに熟練の面もたなければならぬ。註4つまりラディスラスは少年たちは身体を鍛えるために運動の激しい遊びは必要だが、と同時に技も習熟すべきと考えたのである。同じくイタリアのサドレート枢機卿（一四七七一—一五四七）は、古代ローマの伝統的な体の訓練、例えば、ボール遊び、ランニング、投げ槍、騎馬などが、若者たちを戸外で運動させ、洗練した技、高度に専門化した訓練よりも、秀れたエネルギー、自発性を養うものと指摘していた。註5

興味深いのは、十六世紀のスペインの人文主義者ベラスで、彼は子供のゲームを合法的と非合法的に分けた。すなわち、ボール、跳躍、競走、体操などは前者に属するが、サイコロ、トランプ、その他チャンスで勝負するゲームや水泳などは非合法とみなした。つまり賭事を伴う遊戯を禁じたのである。註6しかし、なぜ水泳が非合法的

なのか理解できないが、おそらく今日のように小学校で水泳を体育の一部として教えたり、また十分な浮袋もなかったので（当時、泳げない子供は豚の膀胱をふくらませ、それを背負って泳いだ）、水死する子供が多く、危険視されていたのだろうか。

イエズス会士たちも、ルネサンスの運動重視という新しい意識に貢献した。カトリック教国でのイエズス会士たちの教育活動はめざましいものであるが、彼らの著わしたラテン語の体操概論書は、当時ばかりでなく、十八世紀の医師たちからも、身体健康法のための基本的文献として利用されたのである。例えば、ティソーの『医学的、外科学の体操』もそのひとつであった。^{注7}同書で、体操競技は体のあらゆる部分が同時に訓練される、と推奨していた。

ルネサンス（4）——子供をみるブリューゲルの眼

本連載ではブリューゲルのウィーン美術史美術館の『子供の遊戯』を中心に論じたので、同画家による他の

油彩画や版画における遊戯に注目する場合でも、ウィーンと同種類のものに目を転じた。しかし、ブリューゲルはこの作品では季節として強い日差しの中、初夏を選んだので、九十種類以上の遊戯を描きながら、冬の遊戯は除外せざるを得なかった。だがいくつかの作品にみられる冬の典型的な遊戯、例えば、スケート滑り、橇滑り、コルヴェン遊び（一種のアイスホッケー）、氷上での独楽回しなどをここで着目してみたい。まず冬の遊びが描かれた作品を列挙してみよう。

「シント・ヨリス門前の氷滑り」（素描一五五八年、

図1、2）

「雪中の狩人」（一五六四年、図3）

「鳥獣のある冬景色」（一五六五年、図4）

「ベツレヘムの戸籍調査」（一五六六年、図5）

「雪中の東方三博士の礼拝」（一五六七年、図6）

こうしてみると、ブリューゲルは一五五八年というかなり早い時期に、版画のための下絵素描「シント・ヨリス門前の氷滑り」で種々な冬の遊戯を描写している。



図1 ブリューゲル「シント・ヨーリス門前のスケート滑り」銅版画（下絵素描 1553年）

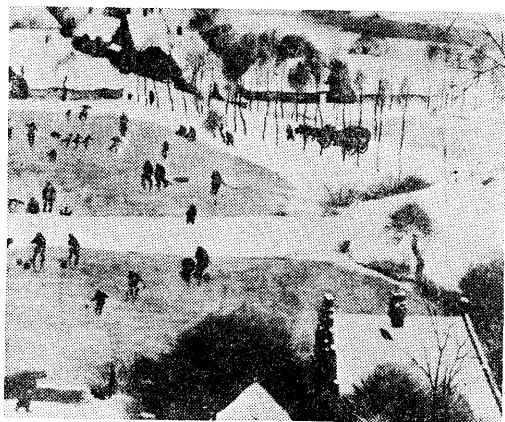


図3 ブリューゲル「氷滑りを楽しむ子供」（「雪中の狩人」の部分）油彩 1565年



図2 コルヴェン遊び（図1の部分）



図4 ブリューゲル「鳥罾のある冬景色」油彩 1565年



図6 ブリューゲル「橇滑りを楽しむ幼い子供」(「雪中の東方三博士の礼拝」の部分) 油彩画 1567年



図5 ブリューゲル「スケート靴をはく少年と橇滑り」(「ベツレヘムの戸籍調査」の部分) 油彩画 1566年

この作品には先述の冬の典型的な遊びがすべて描写されている。ただしここではスケート滑りもコルヴェンも大人の遊びとして描かれていた。とくにスケート靴はかなり詳細に描写されていて、興味深い。おそらく金属のエッジつき木製の台に左右穴をあけて靴を紐で縛ったのであろう。中世のスケート靴は靴の下に動物の骨を縛って滑っていた。例えば、十二世紀のフィッツステファンの『著名なロンドン市民のスケッチ』の中で、ロンドンの北側の沼地が氷ると、その上で若者たちが遊ぶ。ある者はスピードを出し橇滑りをする。「他の者はかかとの下に骨を縛り、小さな先の尖った杖で自分自身を動かし、空を飛ぶ鳥のように、弓から放たれた矢のように速く滑る」と述べている。それが十三世紀にはオランダですでに鉄のエッジつき木製の台が考案され、ブリュージュの時代に至るのである。因みにエッジが装備されたスケート靴が流行するのは今世紀になってからである。

ところでブリュージュの画面の前景で、幼い子供が橇滑りを楽しんでいるが、ウエインの研究によると、これ

は大きな獣類、例えば牛か馬の下顎骨を利用したものである^{註9}。最初の橇が動物の骨というのも民俗学的にも注目すべき事実である。なお「ベツレヘム戸籍調査」では、三本脚の椅子で説教用椅子 *preekstoel* とよばれるものを橇代わりに使う子供たちの姿もみられる。なぜなら下顎骨は幼い子供しか中に体が入らないからであろう。その側で二人の男の子が鞭独楽遊びをしているが、氷の上では滑りもよく、十分楽しめるのであろう。

「シント・ヨリス門前の氷滑り」は後の油彩画と比べて、ひじょうに寓意的性格が濃い。それは版画化されたとき、発行者ヒエロニムス・コックによって付された銘文によって明白となる。

「アントウエルペン市の前で
人びとは氷滑りをする。

こっちの方へ、またあっちの方へと滑り、

見物人はあらゆる方向から

ポカンとそれを眺めている。

よろめいたり、転んだり、

上手に、誇らしげに滑るもの

われわれがどんな風にこの世を

滑っていくかを

この絵から学びなさい。

ある時は愚かに、あるときは賢く、

己れの道を滑っていく。

氷よりもはるかにしろい

この虚ない世の中を。」

しかし「雪中の狩人」以降の数点の油絵画の冬景色には、こうした人生の虚しさへの寓意はあまり感じられない。むしろ彼は絵画史上、初めて冬の情趣をモニュメンタルに制作する意欲に燃え、つぎつぎと宗教的な主題でも、その舞台に雪の深いフランドルの農村を選んだ。その作品群はかなり評判となったとみえ、「鳥獣のある冬景色」などは後に、息子ピーテル二世の工房によって五十数点のコピーが制作された。しかも十七世紀の人びとはこの静かな冬景色にも、ひとつの道徳教訓を求めたのか、ピーテル二世は前景に大きな氷の穴を描き、人びと



図8 ブリュエル「頭と尻遊び」(「シント・ヨリスの縁日」の部分)
銅版画



図7 ブリュエル「輪舞」(「シント・ヨリスの縁日」の部分) 銅版画(下絵素描
1559年)

に「人生の落し穴」を暗喩した（ブリュッゲルの原画の穴は絵の端ぎりぎりに描かれている）。

ほかに縁日の祭りを描いた銅版画「シント・ヨリスの縁日」では輪舞（図7）が、また同版画には、体操ごっこ（図8）もみられ、ひじょうに興味深い。後者は「頭と尻」kop en satと題される遊びで、一人の男の子が逆立ちになった相手の股の中に首を入れ、互いに相手の身体をしっかりと掴んだまま、横にしゃがんでいる男の子の背中の上に「車輪」のように転がる遊びである。すると二人の子供の上下関係は逆になるので、もう一度反対側から転がる。次にはしゃがんでいた二人が同じように「車輪」となる。ゆえにこの遊びを「生身の車輪」Living Wheelsと名づけた研究者もいた。^{註10} この遊戯はブリュッゲルの油彩画や他の銅版画には描かれず、この「シント・ヨリスの縁日」においてのみだが、祭りに関連する特殊な遊戯とは思えない。この銅版画より少し後に、マルテン・ヴァン・クレーヴェがおそらくウィーンのブリュッゲルの「子供の遊戯」に啓発された遊びの絵を制作

している（図9、図10）。約三・四十種類ほどの遊戯の中で、とくに前景にこの「頭と尻」の遊びがみられる。ゆえに当時男の子たちの愛好した体操ごっこと考えてよいだろう。またタイル画の研究者ヤン・プライスの研究によると、十七世紀オランダの銅版画（図11、それに基づく十八世紀の四枚組合わせのタイル画もある）、また同時代の二枚の組タイルにもこの遊びは稀ではあるが登場している。^{註11}（図12）。

この遊びではブリュッゲルの版画より約一世紀後に発行されたジャック・ステラの『子供の遊戯と楽しみ』にも歌われた。銅版画の挿画（図13）はブリュッゲルの子供たちと全く同じ遊びで、おそらくフランスでもポピュラーな体操ごっこだったのであろう。ただしここでは四人ずつ三組の「尻と頭」が出来ているので、半円形に次々と転がることができ、よりダイナミックである。そこには「尻と口の遊び」Le jeu de pet et gueuleと題し、次のような四行詩が添えられている。



図9 マルテン・ヴァン・クレーヴェ「子供の遊戯」油彩 1570年

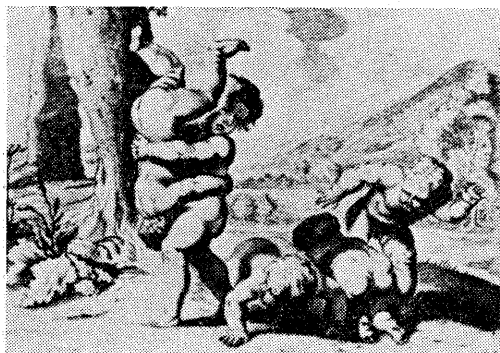


図11 C・ホルステーション「頭と尻遊び」銅版画
17世紀中期



図10 マルテン・ヴァン・クレー
ヴェ「頭と尻遊び」(図8
の部分)

口と尻の遊び

「この楽しみはとても無邪気だ
この気楽しの遊びの中で、
子供たちは思う存分戯れる
だが彼らは互いの股を締めつけるので

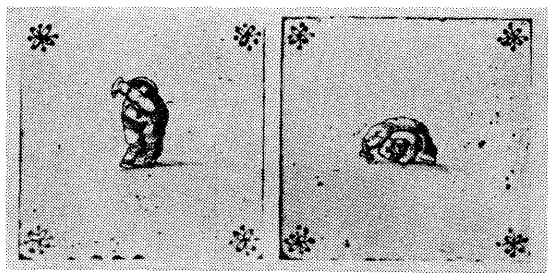


図12 「頭と尻遊び」 オランダのタイル画 17世紀
中期

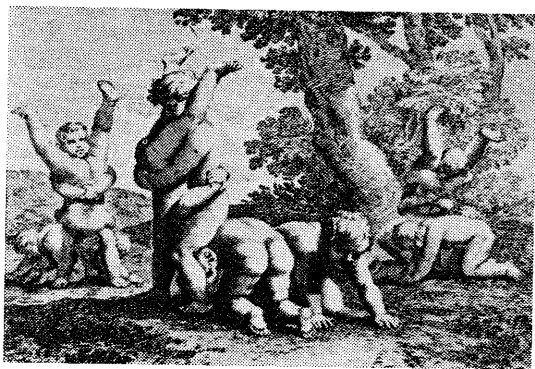


図13 クローディン・ブゾネ「頭と尻の遊び」ジ
ャック・ステラ『子供の遊びと楽しみ』銅
版画 1657年より

うっかりして、あるいは

故意に出した尻を

鼻は恐れねばならない。^{註12}

他方、民俗学者ゲーニユベ

ーはかつてフランスのディジ

ョンで行なわれた「阿呆祭り」

で、二人の道化がこの遊びを

演じたことを指摘した。彼は

この遊びが「倒置、増殖、高低

の弁証法の魔術的シンボリス

ムの表題」と解釈している。^{註13}

なおウィーンの「子供の遊

戯」を除いて、ブリュッセル

の作品の中でもっとも子供の遊びが多く画かれているの

は、「謝肉祭と四旬節の喧嘩」(ウィーン、美術史美術

館、図14)である。この作品はウィーンの「子供の遊

戯」の一年前、一五五九年に制作されているので、いく

つかの遊びはすでに先例となっている。



図14 ブリューゲル「謝肉祭と四旬節の喧嘩」油彩 1559年

キリスト教の国々では、キリストが復活した日以前の四十日間、肉食を断ち、禁欲の生活に入るが、これを四旬節とよぶ。そのため四旬節に入る三日間（あるいは一週間）、民衆は仮装行列、路上寸劇などの見世物に興じ、賭事をしたり、大酒を飲み、馬鹿騒ぎをする。こうした大人たちの遊びに混じり、子供たちも思い思いの遊びに没頭して解放感を味わう。謝肉祭と関連した子供の遊びとみられるのは、前景左端に立つ男の子で、彼は丸帽の上に後述の「豆祭り」の王の扮装のつもりで紙の冠をかぶり、手に謝肉祭のアーモンドと蜂蜜入り菓子をもつ（図15）。同じ姿の子供は、季節画シリーズの「暗い日」にもみられる。この男の子が前掛けをすることは当時の習慣としては決して珍しくはなかった。それは十六世紀



図15 ブリューゲル「豆祭り王に扮した子供」（図14の部分）

には衣服の洗濯はそれほどひんぱんに行なわれず（かなりの時間と労力を費すため、親たちは子供たちの衣服の汚れを避けるために）こうした大きな前掛けをさせていたからである。また彼は腰に太いソーセージを二本はさんでいるが、これも謝肉祭の風俗のひとつであった。

同じく前景で仮面をかぶり、大きなワラの帽子に木のスプーンをつけ、二本のローソクを点した帚をかつぐ男の子がいる（図16）。彼は扮装から倭人を装っているが、おそらくオリエント風なマントを着て前を行く仮面の男の息子かもしれない。ローソクつき帚は二月三日に祝祭日をもつ聖ブラシウスに因んでいるのだろうか。今世紀の初め頃まで、ブラバント、リンブルク、カンペン地方



図16 ブリュエゲル「仮装行列に参加する子供」（図14の部分）

では二月三日に今年も肺の病に罹らないようにと、ワラの巻いた棒にその点したローソクをつけて歩き廻ったという。

つぎに後景の角の家の前で四人の子供が遊んでいるが、これは「王様乾杯」（図17、直訳は「王様がお飲みになる」という「豆祭り」に因んだ遊びである。それは樽の上で大きなジョッキーからビールを飲む子供を、樽の囲りの三人の子供たちが手をあげてはやしたてていることから分かる。「豆祭り」というのは、もともと一月六日の御公顕節に各家庭で祝われるゲームで、その日のために主婦は一個の空豆入りのケーキを焼く。そして家族全員でそのケーキを分け合い、空豆の入った一片を得



図27 ブリュエゲル「王様乾杯」（図14の部分）

た者が、その日の王様となり、家あげて『王様乾杯』と祝杯をあげる。この祭りはちょうどブリュッゲルの生きた十六世紀頃から西ヨーロッパでポピュラーとなり、同時代の絵画にもしばしば描かれたが、とくに十七世紀ではヨルダーンスやモレナール、ハブリエル・メツーなど

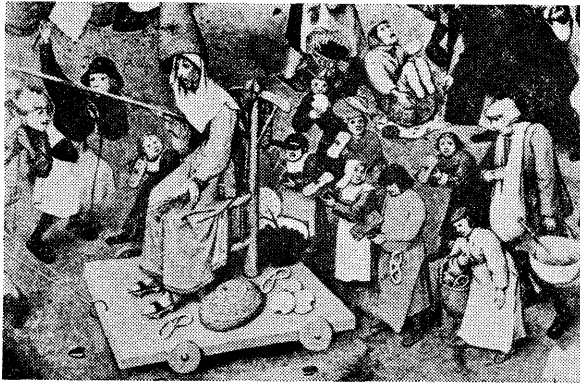


図18 ブリュッゲル「四旬節側の楽隊」(図14の部分)

どフランドルやオランダの画家たちによって愛好された主題となった。

また後景の道路では六人の男女(子供も含め)による輪舞が行なわれているが、前述の「ホボケンの縁日」と同じ踊りがみられることから、謝肉祭の祭りとの関係があるのだろう。というのは四旬節の期間、人びとは踊ることを禁じられていたからである。

ところで四旬節側の遊戯はどうであろうか。まず目につくのは、四旬節の擬人像である老婆の車の背後の「カタカタ鳴らし」のグループである。この鳴物の説明はすで行なったが(図18、第九回、No.57参照)、今日、筆者が気がついた点は、ブリュッゲルが意図的に謝肉祭側の楽隊と対比させている点である。すなわち謝肉祭側では、金かねのカップ、魚焼き用の鉄網にキッチン・ナイフといった厨房楽器、ロンメル・ポット(素焼きの壺に豚の皮を貼り、中央に固着させた棒を上にはひっぱり、「ボンボン」とリズムをとる楽器)や古い形のヴァイオリンなど、各種の「音」はまことに賑々しいかぎりであろう

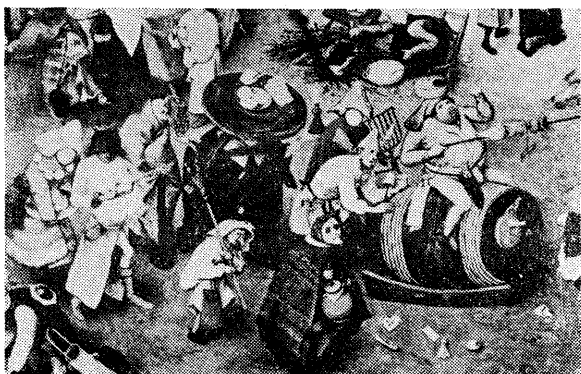


図19 ブリューゲル「謝肉祭側の楽隊」(図14の部分)

(図19)。それに対して四旬節側の子供たちのもつ「カタ」は複数合わせればかなり力強い響きを出す^{注16}が、その音色は一樣で、依然として地味である。このほかにも前景左端の「サイコロ遊び」のようないくつかの遊びは描かれているだろうが、多くは大人のそれと区別するの

が難しい。なおこの鳴り物が七つの徳目シリーズの版画の「剛毅」(図20)では、怪物たちのもつ巨大な「武器」として登場してくるのは意外である。おそらく板の上のハンマーは猛烈な騒音で敵側を威嚇するだけでなく、それによじ登ろうとする数人を一度に潰すこともできる。さらに板そのものは数人を防禦する強力な「楯」ともなった。

その他広場の中央では五人の男の子が独楽回しに励んでいる(第八回、No.55参照)。時禱書の月暦ページでも三月の余白に、独楽回しが描かれることで、この遊戯はヨーロッパでは一般に春の遊び、おそらく四旬節頃の遊びと解される。ちょうど一五八一年に出版されたイギリスのリチャード・マルカスターの『ポジションズ』の中に、独楽回しについて、その遊戯の季節をこう述べている。「独楽回しはあらゆる技を示す練習となるのに、それを馬鹿にする大人がいたら、四旬節がやって来て、独楽回しの時節になったとき、少年たちはその人を鞭で打ち、罰する。」^{注17}

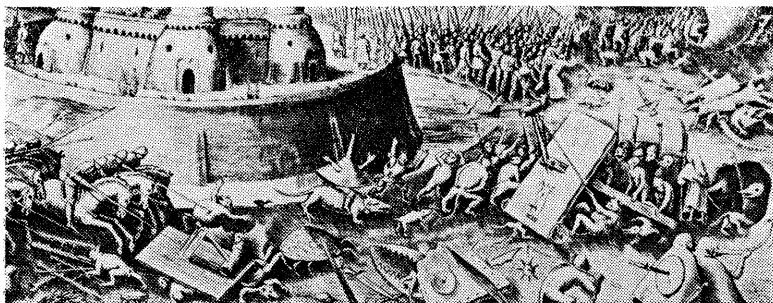


図20 ブリュエール「カタカタ鳴しの武器」(「剛毅」の部分) 銅版画 (下絵素描 1560年)



図21 ブリュエール「鍋投げ」(図14の部分)



図22 ブリュエール「おはじき遊び」(図14の部分)

四旬節の遊びとはおそらく関係ないだろうが、近くで二組のカップルが「鍋投げ」(図21)を楽しんでいる。すでに受け取り損ねた土製の鍋の破片が地面に散らばっている(七回、No.45参照)。この遊びは「壺投げ」と題されることもあるが、脚つきの同種のものがブリュエールの版画「肥った所」でも、実際に火にかけて鍋として使用されているから、壺とするのは間違いであろう。また彼らの左側では二人の年長の男の子が二人でおはじき遊びをしている(図22)。十七世紀のタイル画でもそうだが、おはじきは当時まだ女の子の独占遊びでは

なかったのである。

このようにブリュッゲルの子供の遊戯の世界には、それ以前の絵画史にない新しい視点が示されていた。すなわちできるだけ多種類の遊戯を列挙しようとする百科事典的な意図である。こうした意図はブリュッゲルの同時期の他の作品、例えば「ネーデルラントの諺」（一五六〇年、西ベルリン、美術館）にもみられる。彼はここで同一画面に八十五種類以上の諺の形象化を試み、しかも「子供の遊戯」と同様、個々の諺を独立的に描いた。また今述べた「謝肉祭の四旬節の喧嘩」でも、彼は謝肉祭で行なわれるあらゆる種類の見世物とイヴェント、また四旬節側の禁欲グループ、慈悲行為、ミサへの参列などで画面を埋め尽している。

「バベルの塔」（一五六三年、ウィーン、美術史美術館）では当時大聖堂や城塞などを建設するときに使われた建築技術、建設工事の過程の詳細を描き出そうとした。「季節画」シリーズ（現存五点）でも、従来の月暦画のように一画面にひと月の営みを描くのではあきたらず、例え

ば「雪中の狩人」（一五六五年、ウィーン、美術史美術館）では十二月、前後の季節にみられるあらゆる種類の真冬の自然現象と人間の営為——狩人の山からの帰還、豚の屠殺と毛焼き、氷滑りで楽しむ子供、煖炉の不始末からの火災——などを念入りに描く。^{註18}

あるテーマのもとで考え出される社会風俗、民衆文化と行事、人間の日常の行為、種々の農民のタイプなどを「百科事典的」というか、「全列挙主義的」に描出しようとする姿勢は、まさしくブリュッゲル絵画の特徴なのであった。だが「子供の遊戯」の場合、彼がなぜこれほどまで「観察」し、「記録」しようとしたのだろうか。

種々の記録によると、すでに十五世紀頃からネーデルラント各地で、市庁舎の玄関、教会内や敷地内、道路での遊びに対し、市の禁止令が出されていた。最古のものは一四五六年のドルトレヒト市の市令で、道路に沿って子供が輪回しをすることを禁じていた。また一五五七年にも、ハールレムでつぎのような発令が出ていた。「いかなる子供も神の家である教会の敷地内や町で石や骨

(指骨遊びに使う)をガラスにむかつて投げたり、ボールをそこにぶついたりしてはならない。……それに対して子供の両親は五ストイヴェルスの罰金を支払うこと。^{註19}確かにブリュッセルがウィーンの「子供の遊戯」を描いた一五六〇年代、すでにアントワエルベンは国際商業都市として繁栄し、人口も約十二万人を越え、ヨーロッパ屈指の大都会となっていた。ゆえに二百人以上の子供たちがこの画面のように広場を占領して遊び興じることは不可能であった。大人も子供も広場で思う存分遊ぶ世界に没入できたのは、せいぜい一月の御公顕節、二月ないし三月の謝肉祭、十二月のクリスマス、それに聖人の祝祭日を祝う縁日位だったのであろう。また子供たちの手作り遊具もいつの日か縁日で商人の売る人気玩具にとつて代わり、また遊び自体も時代とともに変遷し、忘却されてしまうのであろう。実際、十七世紀中頃のオランダのタイル画にみられる子供の遊戯にも、すでにNo.9のナッツの穴あけ遊びやNo.12のガラガラ遊びのような手作り遊具は姿を消していた。その上、オランダはプロテスタント

の国なので、もはや子供たちはNo.4のミサごっこ、No.77の宗教行列ごっこを知らないであろう。その意味でもブリュッセルが九十数種の子供の遊戯を描き残した歴史的意義は大きく、彼の作品はいわば絵で語られた「年代記」といってよいだろう。

ここで注目したいのは、マルティン・ルターが一五三〇年、四歳の長男ハンス宛に出した手紙の内容である。^{註20}

その中で彼は多くの子供たちが楽しく遊んでいる「奇麗ですばらしい庭園」について語っていた。「そこには沢山の子供たちが出かけるのですよ。みんな金のスカート(当時男の子もスカートをつけていた)をはき、樹の下でりんご、梨、さくらんぼ、すもも、桃を食べ、歌い、跳び、陽気になるのです。また金の手網と銀の鞍のある小馬をもっています。そこで私はその庭園の中の男に『この子供たちは誰のですか』と聞きました。すると彼はこう云いました。『喜んで祈り、学び、教度な子供たちです』と。そこで私はこう云ったのです。愛する人よ、私にもハンス・ルターという息子がいます。あの子

もこの庭にやって来て、こんなに美味しいりんごや梨を食べ、こんなに素晴らしい小馬に乗り、この子供たちと遊ぶことができるだろうか。すると彼はこう云いました。『もし息子さんが心から祈り、喜び、敬虔ならば、この庭にも来るができます』と。以上の文面から、子供の躰に対するルターの思想の一端が窺えるのである。彼は子供が進んで祈り、一生懸命学び、神を信じるならば十分に楽しく遊ばせてもよい、実際、そうした子供のみ樂園のような遊び場に行くことが許されると教育しているのである。

もうひとつ同時代のフランスの詩人ラブレーの『ガングンチュア物語』にも注目してみよう。その第二十二章で主人公のガングンチュアは詭弁学者の先生がたの監督のもとで、パリでの生活を始めるが、決して勉強三昧の生活を余儀なくされたのではなかった。若き主人公は朝食を終え、教会に出かけてミサを聴聞し、帰宅して小半時間も勉強した後、昼食をとる。その後、彼は「遊び」を許されるのである。そして列挙されたのが二一七種類

の遊戯（一五四二年版）だった。思う存分遊んだ後、ガングンチュアはお酒を飲み、二、三時間昼寝をする。その後、再び祈禱書を読み、晩食を済すや、双六などをして、夜食も食べ、就寝につく。このようにして、ガングンチュアの日課には勉強とともに遊びも加えられていた。いやむしろ遊びも教育の一環と考えられていたと解すべきであろう。ラブレーの研究家ミハイール・バフチンはこの遊戯の中に、「祝祭の民衆的・広場的側面と外面的なつながりだけでなく、内面的な本質的つながりを持っていた」と論じている。しかしバフチンの解釈する「内面的な本質的つながり」とは遊戯のもつ寓意性で、例えば、トランプ遊戯を「イタリヤをめぐるフランソワ一世、クレメンス七世、カルロス五世間の争い」であるとか、九柱戯のゲームは「地上の生活全体と、その無常、災厄」と解している。

さらにバフチンは、遊戯がパロディ、もじりの占い、予言、謎歌の課題と同様に、中世的な観念のもつ終末論的な時を「良き陽気な時に変身させる」と、その積

極的意味を認めている^{註11}。だがブリュッセルがはたして、フチーンの解釈するような形而上的世界観をもって遊戯を描いたかどうか、筆者にははなはた疑問に思える。

- 注1 フリップ・フリニス『子供への誕生』(杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房、昭和五十五年)八十五頁。
 注2 Mary Frances Durantini, *The Child in Seventeenth-Century Dutch Painting*, Michigan 1983, p. 186.
 注3 William Harrison Woodward, *Vittorino da Feltrre and Other Humanist Educators*, New York 1963, p. 247 (the first ed. 1897).
 注4 *Ibid.*, p. 138.
 注5 William Harrison Woodward, *Studies in Education*, Cambridge 1929, p. 175.
 注6 Durantini, *op. cit.*, p. 186.
 注7 フリニス、前掲書、八十六頁。
 注8 G.G. Coulton, *Medieval Panorama*, New York 1957, と言及。Fitzstephen は「ローレンス・ベックマンの司祭に記された *Descriptio nobilissimae civitatis Londoniae* に記されたもの」の資料を同社大学教授斎藤勇氏から提供された。
 注9 J. Weyns, *Big Bruegel in de Leer voor honderd- en dertigjarige Dingen*, 1975, p. 21.
 注10 「頭と尻」を Living Wheels の遊びとしていたのは Jacques Stella, *Games and Pastimes of Childhood* (英訳) の解説 246 頁。訳者 Stanley Appelbaum による。

- 注11 Jan Pluis, *Kinderspeelen op tegels*, Assen 1979, p. 173.
 注12 Stella, *op. cit.*, No. 34.
 注13 Claude Gaignebet, *Le Follore Obscene des Enfants*, 1974, pp. 149-150.
 注14 Elke M. Schütt-Kehm, *Pieter Bruegels d.A. "Kampf des Kamevals gegen die Fasten" als Quelle volkstümlicher Forschung*, Frankfurt 1983, p. 47.
 注15 著者はこの男の子が「豆祭り」の王に扮しているのではなく、むしろ聖ブラシウスの日(二月六日)に選ばれた子供の王ではないかと推定している。
 本連載第九回 57 頁では「ガラガラ遊び」としたが、この鳴り物の音から「カタカタ鳴らし」の方が正しいと訂正した。
 注16 「謝肉祭と四旬節の喧嘩」にみられる民族楽器や鳴り物については、拙著『ブリュッセル(世界の大画家)』中央公論社、昭和五十九年、七〇―七一頁参照。
 注17 A. Forbes Sieveking, "Games", *Statespeare's England*, Oxford 1932, p. 481.
 注18 図版にうつった筆者の注16の前掲書を参照。
 注19 J.W.P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel Voor de Zeventiende Eeuw*, 's-Gravenhage 1914, p. 102.
 注20 Klaus Arnold, *Kind und Gesellschaft in Mittelalter und Renaissance*, Paderborn 1980, pp. 181-182.
 注21 ミニール・フチーン『フランシス・ラングラーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』(川端香男里訳、せりか書房、昭和五十五年)二〇二頁―二〇九頁。

(明治大学)